

「自殺の翌日」

山野浩一

「なぜあなたは自殺したのかね？」

「自殺なんかしていません。ごらんのように生きています」

「では昨夜このビルから飛び降りたのはあなたではないのかね」

「もちろんです。私は飛び降りていません」

「だが自殺死体があなたのものであることは、肉体的特徴と数人の証言によって証明されている」

「でも自殺した人間がこうして生きているはずはないでしょう」

「その通り、だから問題なのだ。最初はあなたを偽物かと考えたが、そうではないことも証明されている。むしろあなたは自分というものについて、何か考えちがいをしているのではないかね」

「でも、私がこうして生きている以上、自殺者を私ではないと考えるべきでしょう」

「むろん考えたよ。だが自殺者があなただという証拠はいくらでもあって、全く疑いようのないことなのだ。むしろあなたの現在を疑ったほうがつじつまが合う。どうかね。」

もう一度ゆっくり自分の存在について考え直してみる気はないかね？」